功ヲ以天地造化ノ力ヲヌスンデ成之、良ニ可惟也、近年本邦ニ牡丹ヲ賞スル事甚盛ナリ、歐陽永叔ガ牡丹ノ譜ニ、牡丹ノ名九十餘種ヲ載タリ、今日本所在其品甚多シ、

〔和漢三才圖會九十三〕牡丹（ぼたん）　花王　鼠姑　鹿韭　百兩金　木芍藥　和名布加美久佐（ふかみぐさ）○中略

芳草

按、牡丹根皮、山城大和多出之、而家種者不入藥用、凡牡丹芍藥花貴重也、和漢時代同、本朝聖武帝時盛賞之、今亦奈良多出名花、諸國富家一株價以數百金移栽之、歲歲出珍花、故近於千品、其名不枚擧焉、千葉而厚徑六七寸、純紅如柘榴花色、而形儀全備、甕子小而不綻者爲極上、純白者亦以此可准知、夏月採川圯（洒乾）古圃土細砂（以上三品）篩和、八九月出紅芽後可移栽、培之不可用糞溺、冬月用油渣少入根傍、或灌鮮魚洗汁、亦佳、四月開花、花落甕破結子、七八莢、八月莢裂中子黑色、十粒許如豆大、候將落時、採直蒔之（如經久者難生）春載粒出生、如豆初生、五六年後初可見花、總珍花出於子種、而有紫花而白綬者、或本純白末紅者、或黑牡丹、冬牡丹等之異品、然所貴重者、止純白純紅之二耳、紫者爲最下、正黃者未曾見之、謝肇淛之言當焉、鷗氏所謂姚黃牛家黃者其如何色耶、

凡二十年以來人能接得之、而名花流布處處、蘇頌既謂秋冬移接、則太唐自昔接之矣、

〔廣益地錦抄四〕牡丹　唐の牡丹は日本の獅子ぼたんなり、紅白の二品あり、紅といふはむらさき紅にて、花のまわりをちらけてうす色なり、白といふはつやもなくうるみて、はなのうらに黑豆（コクヅ）のごとく成ルつけ有、唐繪に書しかみな此二種なり、今は實生（みばへ）よりかわりて、紅白品々多シ、藥種には花ひとへにて紫白成ルを用といふ、

〔農業全書十藥種之類〕牡丹

牡丹栽培

牡丹は是を花王と云、さかるに花を見るのみならず、根をとり藥種とし、尤良藥にて多く用ゆる物なり、是も山城にて多く作る、花一重にして白く、又は紅紫なると、兩樣を藥種に用るなり、子をうゆる法、秋實よく熟し黑くなりたる時取置て、肥地を尙もよく糞し、なる程細かにこなし、熟し